

第三十六回 齋藤茂吉短歌文学賞

本多 稜 『時剋』

本阿弥書店

選考委員

委員長 三枝 昂之

委員 小池 光

小島ゆかり

永田 和宏

【贈呈式】

令和七年五月十八日（日）

（五十音順）

# 本多 稜 『時剋』

(自選)

くれなるの薔薇の一輪胃の底に咲かせたるわが戒めの神

説明についてゆけないわれにはただ脾臓膵臓画面数多し

雪山に遭難中のわれを想ふアメのみ許されゐる病室に

一首作りわが細胞を一つ増やすがんに取りられたら取り返すべく

にくたいがわれを去りゆく日のための心を花に移すれんしふ

歌は盾矢ともなるべし詠みて詠みて歌ひ潰してやるぞリンパ腫

稽つかみ田から剥がせば針金のごとき稲の根陽に輝けり

コスモスの朝日に透くる輪郭のくきやかに死が可視的となる

振る腕に地を蹴る脚に風を生みいま一瞬を響け体幹

歌かつて翼なす羽根なりにしを今は張るべき根としてわれに

● 選考委員による選評

試練が与えた成果

三枝 昂之

登山など活動的な世界で短歌の世界に新風を吹き込んだ本多稜氏だが、今回の『時剋』は一転、「くれなゐの薔薇の一輪胃の底に咲かせたるわが戒めの神」と胃に腫瘍が見つかったからの闘病作品集となった。

しかしその世界は事態と正面から向き合う本多氏らしい異色の闘病詠、試練が与えた、めぐりのさまざまな営みへの一步深くなった眼差しにも特色がある。

葉月とはかういふことか伸び上がり夏のみどりが夏空を吸ふ

ひかりつつ柳の若葉空に溶け胃無しランナー完走したり

二首目は退院後に参加した駅伝。「胃無しランナー完走」には驚かされる。人生に逆境や挫折はつきものだが、克服する精神力が人間にはあることを教えて、力強い成果だ。

戦闘する歌集

小池 光

五十代の働き盛りの人間がある日突然ガンの宣告をされる。そして胃と脾臓を全摘する手術を受ける。その苛酷な日々と回復後の活動が全編を貫いている歌集である。つまり闘病歌集なのだが、いわゆる闘病歌集が否応なくはらむ不安や、心身の苦悩、絶望がどこにもないのが胸を打つ。境遇を嘆くことなく、堂々と立ち向かい、戦闘し、十五キロも痩せながら生活に復帰する。その力強さが本集を輝かしいものにし、読者を率直に励ますものとなっている。

術後市民駅伝を走り、旅をし、山に登る。

その活力に充ちた行動は見事の一語に尽きる。

歌かつて翼なす羽根なりにしを今は張るべき根としてわれに

という一首があるがまさにその通りの歌集を得た。よろこびとしたい。

## 胃無しランナーの歌

小島 ゆかり

ひかりつつ柳の若葉空に溶け胃無しランナー完  
走したり

歌集『時剋』を象徴する一首。ひかりのなかの柳の若葉の美しさは、どんな鑑賞の言葉も届かない尊さをもって、この胃無しランナーを照らしています。

壮絶な闘病の日々が、まさに「時剋」の志をもって詠み継がれる一冊ですが、その表現は大きく力強く、思いは深く愛情に満ちて読む者を励まし、歌うことの原点に立ち返らせてくれます。

玉子焼き鮭の塩焼き白ごはん何といふ明るさよ  
入院の朝

きさらぎのヒヤクジツコウの清しさをわが目は  
君を抱くごと見上ぐ

岩稜に吹き上げられて落つれども交尾を解かぬ  
蜻蛉を見たり

おめでとうございます。

## 濃密な時間―本多稜歌集『時剋』に寄せて

永田 和宏

日々の時間、一年という時間の密度の濃さに圧倒されるような歌集である。胃に腫瘍が見つかり、病名も確定しないままに手術を受けてからの一年が、ほぼ毎日歌作りによって埋められてゆく。私たち読者も、その経過にリアルタイムで付き添っている気分になる。

自分にしか詠めない歌があるのだと開き直つて  
八月の空

歌はすべて「自分にしか詠めない」という自覚から詠われるものだが、本多稜の場合は、それは「自分のこの時期にしか」という自覚であり、覚悟でもあろう。

氣遣ひはときにガラスの壁をなし病ゆるもう呼  
ばれぬ会議

五倍速で生きれば元を取れるかと平均余命調べ  
て思ふ

どちらもいい歌だが、悲しく切ない歌である。しかし作者は、「味うすきコンソメスープ日常は遠しされども取り戻すべく」とポジティブ志向である。それが、例えば術後七十四日で駅伝を走るなどという拳にもできることになるのだが、そんな「暴挙」は作者をも救い、読者をも救うことになる。

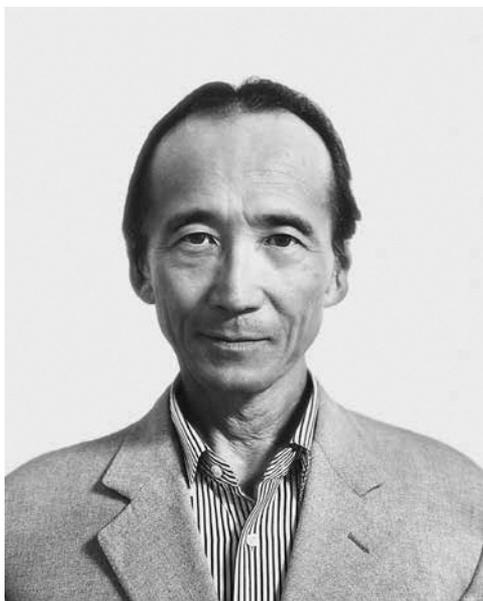
## 受賞のことば

本多 稜

この度は齋藤茂吉短歌文学賞を授与していただき、誠にありがとうございます。選考委員の皆様、また選考過程に関わってくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。はからずも選出していただき驚くとともに、この賞に相応しい歌人にならなくてはと、身が引き締まる思いです。

昨年の三月、蔵王連峰熊野岳にスキーを担いで登頂し、樹氷に覆われて氷の翼となった歌碑に対面しました。「陸奥をふたわけざまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ」の文字は厚い氷の中でしたが、昭和九年八月という文字は一部見えませんでした。「茂吉―いのちの山河」をテーマに、最上川の滔滔たる流れを目にしつつ蔵王へ、そして月山へ、月山からの帰りには鳥海を仰ぎ、茂吉の歌のサンクチュアリに身を置いたのです。

歌のご縁はまこと不可思議ではありますが、音楽性に優れた茂吉の歌は、言葉を越えて心に沁み入るものです。広く遠く、時に深く、これからも歌のご縁を大切にして参りたいと思います。



### 第36回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

#### 本多 稜 (ほんだ りょう)

歌人。1967年（昭和42年）静岡県生まれ 東京都在住 57歳。  
歌誌「短歌人」編集委員、現代歌人協会会員、市民農園運営。

#### 【主な著作等】

歌 集：平成15年『蒼の重力』

平成20年『游子』

平成24年『こどもたんか』

平成25年『惑』

令和元年『六調』

令和5年『本多稜歌集（現代短歌文庫168）』

令和6年『時剋』

受賞歴：平成10年 第9回歌壇賞

平成16年 第48回現代歌人協会賞

平成20年 第13回寺山修司短歌賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房  
 第二回 本林 勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社  
 第三回 塚本 邦雄 『黄金律』 花曜社  
 第四回 前 登志夫 『鳥獣蟲魚』 小澤書店  
 第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院  
 第六回 近藤 芳美 『希求』 砂子屋書房  
 第七回 小暮 政次 『暫紅新集』 短歌新聞社  
 第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社  
 第九回 吉田 漱 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社  
 第十回 佐佐木幸綱 『呑牛』 本阿弥書店  
 第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社  
 第十二回 森岡 貞香 『夏至』 砂子屋書房  
 第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房  
 第十四回 藤岡 武雄 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社  
 第十五回 清水 房雄 『獨孤意尚吟』 不識書院  
 第十六回 小池 光 『滴滴集』 短歌研究社  
 第十七回 三枝 昂之 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店  
 第十八回 花山多佳子 『木香薔薇』 砂子屋書房  
 第十九回 永田 和宏 『後の日々』 角川書店  
 第二十回 河野 裕子 『母系』 青磁社  
 第二十一回 伊藤 一彦 『月の夜声』 本阿弥書店  
 第二十二回 品田 悦一 『斎藤茂吉―あかあかと一本の道とほりたり―』 ミネルヴァ書房  
 第二十三回 篠 弘 『残すべき歌論―二十世紀の短歌論―』 角川書店  
 第二十四回 秋葉 四郎 『茂吉幻の歌集『萬軍』―戦争と齋藤茂吉―』 岩波書店  
 第二十五回 栗木 京子 『水仙の章』 砂子屋書房  
 第二十六回 小島ゆかり 『泥と青葉』 青磁社  
 第二十七回 柏崎 驍二 『北窓集』 短歌研究社  
 第二十八回 橋本 喜典 『行きて帰る』 短歌研究社  
 第二十九回 大辻 隆弘 『景德鎮』 砂子屋書房  
 第三十回 春日真木子 『何の扉か』 角川文化振興財団  
 第三十一回 吉川 宏志 『石蓮花』 書肆侃侃房  
 第三十二回 大島 史洋 『どんぐり』 現代短歌社  
 第三十三回 岡野 弘彦 『岡野弘彦全歌集』 青磁社  
 第三十四回 佐藤 通雅 『岸辺』 角川文化振興財団  
 第三十五回 玉井 清弘 『山水』 短歌研究社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇 山形市松波 丁目八一―

山形県観光文化スポーツ部県民文化芸術振興課内

TEL・〇三三一六三〇―二三〇六